明治初期日朝関係と詩文応酬

鈴木　文

はじめに

日本人の朝鮮認識[1]／自己認識に関する研究は、「友好運動の一層の発展を促すためには、日本人のもつ朝鮮観を自らふりかえり、そのなかの正しい方向をのばし、誤りを正す努力をかさねなければならない。[2]」という問題意識から始められた。そのため研究史上では日本人の朝鮮認識の中にある「偏見」や「蔑視」の問題が論点となった。特に問題とされたのは近代における朝鮮認識であり、「日本人の頭のなかに残っている植民地支配者意識[3]」を克服するために近代に存在した朝鮮に対する偏見をあぶり出すという方法の研究が行われてきた。その際、近代以降と比較して近世を「友好」の時代として強調する研究や、あるいは前近代から連綿と「蔑視」が存在していたかのように捉える研究がなされたが、近年ではそうした視点に対する疑問を呈する研究が現れており、近世日朝関係の複雑な様相をその軋轢を含めて実証する研究が進められつつある。[4]以上のように、近世～近代（一九世紀後半）に日本人の朝鮮認識がどのように変遷したのかを考えることは日本人の朝鮮認識／自己認識を考える上で重要な論点となっている。

そこで本稿では、近世から近代の朝鮮認識／自己認識の変遷を考察するための一つの視角として詩文応酬という行為に着目する。詩文の応酬をするという文化交流の行為が日朝関係史においてどのような意味を持っていたのかについて考察を試みたい。近世日朝関係研究史において、詩文

応酬は日朝交流の「友好の象徴」として注目されてきた。[5]近代においても同じ「漢字文化圏」としての共通の文化が交流の手段となることは指摘されている。ただし、近代の詩文応酬については日中関係における研究が主流であり、朝鮮関係はあまり注目されていない。[6]近代の日朝関係史の中で詩文応酬と関わりのある興亜会に関する研究においても、詩文応酬という行為の存在については言及されるだけに留まっている。[7]このように詩文応酬が日朝関係研究史上で注目されてこなかった背景には、先述した問題意識のもとで、「近代化」を基準とした視点で一九世紀の日朝関係史を描こうとする傾向があった。しかし詩文応酬は日本で明治時代に至った後も両国の間で行われており、両国の相互認識を形成する上で一定の役割を果たしていたことを無視すべきではないだろう。一九世紀に「西洋文明」と「東洋文明」のはざまで生き残る詩文応酬が日朝関係に果たした役割とその意味の変遷を考察することが本報告での課題である。特に明治初期に日朝関係が新しく再編された最初の使節である第一次朝鮮修信使の来日時を中心に、詩文応酬という同じ行為が時代状況により異なる意味を付与される様相を明らかにしていきたい。

1　近世の詩文応酬

(1) 近世朝鮮通信使と筆談唱和

近世（朝鮮後期）において日朝間には国交が成立してはいたものの日朝相互の人々による自由な往来は禁じられていた。例外的に交通を許された対馬藩の人間及び漂流民の交流以外で日朝間の接触が行われたのは、朝鮮から来日した通信使を通じた交流のみであった。一六〇七年に徳川幕府成立後初の使節が来日して以来、近世には計十二回の通信使が訪日したが（そのうち最初の三回は「回答兼刷還使」）、使節は釜山から船で対馬へ向かい、下関などに停泊しながら瀬戸内海沿岸を通り、大坂から江戸まで通行する間に各地で大名から接待を受けながら移動した。その移動の過程や目的地の江戸において、使節随行員と日本人の間で盛んに筆談唱和が行われた。近世に朝鮮から派遣された通信使との交流のために、多くの日本人が使節のもとを訪ねたことはよく知られている。

彼らは通信使と詩文応酬をし、書画の揮毫を請い、筆談を行った。そのことは、通信使側の残した記録にも記されている。揮毫依頼のあまりの多さのために、一六八二年から通信使へ揮毫を求める行為に規制がなされていたが、実

際は対馬の人間が賄賂等によって依頼を通していたらしい。特に近世後期になるにつれて益々盛んとなり、江戸で最後に行われた一七六四年の朝鮮通信使の記録によれば、千人の日本人に対して二千余篇の唱和に応じたと言う。

通信使が宿泊する客館には詩文の応酬や書画の揮毫を求めて来る日本人で混雑し、通信使側では深夜までその対応に追われたという。その熱狂ぶりに対しては、日本人の側から批判がでるほどであった。

（2）中井竹山の批判

大坂出身の儒者であった中井竹山（一七三〇（享保一五）〜一八〇四（文化元）年）は著書『草茅危言』[8]で通信使と日本人の筆談唱和の様子を書き記している。

①韓使は文事を主張する故、随分才に秀でたるを選み差越すと見へたり、故に沿道各館にて、候国の儒臣と詩文贈答筆談の事多し、此方の儒臣多き中に、文才の長ぜぬも有て、我国の出色とならぬもまま見へて残念也。夫はさて置、又三都にては平人も手寄さへあれば、館中に入て贈答するに官禁もなければ、浮華の徒、先を争て出る事になり、②館中雑沓して市の如く、辣文悪詩を以て韓客に冒触し、その甚敷は、一向未熟の輩、百日も前より七律一首様の詩荷ひ出し、夫を懐中し、膝行頓首して出し、一篇の和韻を得て終身の栄として人に誇る抔、笑ふ可。斯る事なれば、漢客は諸人を蔑視し、数十篇の詩を前に積置、筆に任せ是を和するに、其中に聲律違ひ、音の違ひたる様の詩あれば、墨を付投出し返すを、広座の内よりにじり出で、拾ひ取懐中して退く等、見苦き事の限り無る可、又韓人の和詩を書するに、文鎮の代りに脚を投出、踵にて紙を押へる等、狼藉至極の事成を有難かりて頂戴するも有、何れも我邦の大耻寔に苦々敷事也、愚は宝暦の聘の時、客館を見物に往きしに、唱和の始りて或席通かかり右の様子は目のあたり目撃せり、苟も志気有者、誰か此輩と伍をなして贈答出可や、たまたま正学真才の人有ても是を愧て初より韓人とは声息をたちたり、③韓人は是を知ず、其の接する所は往々右の如くなれば、渠をして日本に人なし抔といわさん事は実に嘆ず可事也

このように中井竹山は、通信使側が文才に秀でた者を派遣させるのに比べ、日本側は能力の高下に関わらず筆談唱和を求めて通信使のもとへ殺到している状況であることを述べ（傍線部①）、教養もない人間が受け取った詩文を人に自慢するなどの熱狂ぶりを批判している（傍線部②）。

さらに、このような事情を知らない朝鮮人に「日本に人なし」などと言われるようなことは「嘆ずべき事」だと述べている（傍線部③）。

中井竹山の記述からも分かるように、当時の日本人にとって通信使との筆談唱和は教養のある者にとっては勿論、そうした素養を必ずしも持っていない人々にとっても関心の的であった。そうした状況で、日本人の中には「文」の国である朝鮮に対してある種の劣等感を抱く者もおり、「儒教の国＝朝鮮」という認識は近世における一般的な日本人の朝鮮認識の一つであった。こうした「文」の国朝鮮との対比で日本の「武威」が語られるという認識のパターンは近世において一つの典型であった。

2　明治初期の詩文応酬
―第一次修信使来日時の事例―

『朝野新聞』[9]の一八七六（明治九）年六月九日付の論説「隣交論」には、近世の日朝関係について以下のように記述されている。

徳川氏ノ時朝鮮ノ交道ヲ観ルニ、信使来ル毎ニ国書言辞互ニ自ラ相尊大ニシテ其弊遂ニ驕慢ニ陥チイリ大ニ交隣ノ礼ヲ失フヲ知ラズ、使者亦詩ヲ賦シ文ヲ□シ其才ニ誇ル者ノ如シ、之ヲ思ヒ之ヲ思ヘバ豈慨歎ニ勝フ可ケンヤ

「隣交論」の全体の趣旨は、「今ヤ朝鮮我レト隣交ヲ修シ信使国書ヲ奉ジテ来ル、夫レ朝鮮ハ亜細亜ニ位シ古ヨリ専ラ支那ト交通シ、彼ノ明君賢相ニ心酔シ、孔孟ノ道ニ依頼シ古ヲ慕ヒ、故ニ泥ミ習慣殆ンド天生ノ如ク国ヲ鎖シテ宇内ノ大勢ヲ察セズ」と、朝鮮がこれまで中国の文明に「心酔」し、世界の大勢を察せずにいることを述べつつ、修信使来日をきっかけに朝鮮側の意識が変わる可能性を指摘するものである。[10]その中で、徳川幕府の時代の日朝関係について、上記のように朝鮮通信使が「詩文の才を誇っていた」として批判的に述べている。

このように、明治に至ってこれまでの日朝関係を振り返った時、かつて中井竹山が述べた「詩文の才を誇る朝鮮」という認識が持続していたことが分かる。この一八七六年の六月というのは、朝鮮から第一次修信使が来日した時期に当たる。一八一一年に通信使の来日が途絶えて以降、前述した例外的日本人を除く一般の日本人が朝鮮人と直接接することはなくなった。明治に入って一般の日本人が朝鮮人を目の当たりにする最初の機会は、一八七六年五月の第一次朝鮮修信使来日によって訪れた。この使節は明治期に日

朝関係が新しく再編される最初の段階に位置しており、明治政府になってから初めての正式な朝鮮使節であるという点で重要である。

修信使来日時の日本側の朝鮮認識を問題にする場合、詩文応酬の存在が言及はされるものの今まで特に着目されてこなかった。特に日本人にとってこうした文化交流がどのような意味を持っていたのかについては明らかにされていない。近世からの文人交流という歴史があることを踏まえながら、近代に入ってその行為の意味がどのように変容しているか、あるいは変容していないかを丹念に見る必要がある。ここでは修信使の残した史料を踏まえ、主に新聞に見られる筆談唱和関連記事を分析するが、新聞に表れない実際の交流はどのようなものであったのかについて考慮に入れながら分析したい。

（1）第一次修信使と詩文応酬

修信使と日本人の文化交流に着目しているのは、主に韓国側の研究者である。田星姫氏は、『日東記游』巻一留館に書かれた以下の部分を引用し、通信使と同じく一筆書画の要請があったことを指摘している。[11]

（見聞の合間）少し休憩する時に、一筆を要請する日本人が多かったが、私を煩わせることはなかった。館に到着後、かつて士大夫（武士）だった人たちが来て、一筆を要請したが、たまに応じ、しかも気が向くときだけ応じたので、それほど妨げられることはなかった。延遼館で宴会が終わった後、参加者たちがそれぞれ詩を作って送ってくれた。すべて新たに作った詩であり、中には寓意的な詩も多い。かれらの中にも具眼者がいて、私を慕い従おうとする。

このように、修信使が滞留中に旅館へ詩文等を請う日本人がいた。この記述は東京で滞在中の様子を記載したものであるが、書画を乞う日本人は下関や神戸にも存在した。その他宮本小一邸訪問や宗重正邸訪問などの際の宴の場においても詩文応酬が行われた。同じく『日東記游』には「唱酬詩」と題して、日本人との間に取り交わされた詩文[12]の内容が記述されている。このような修信使との詩文応酬の様子は当時新聞においても記事として掲載された。

（2）詩文応酬と新聞報道

多くの新聞は記事の多少に差はあるものの、なんらかの形で筆談唱和について言及している。例えば、先に見た『朝野新聞』の別の記事には、以下のように宮本小一邸で

の饗応の様子が書かれている。(13)

①去る七日外務大丞宮本君の宅にて朝鮮金綺秀を饗応の時、跡見花蹊子も招に応じて其門人中山忠能卿孫女仲子九歳［他五名略］等の六名を率いて来会せり。②席上にて各々全唐紙一枚に大字二字を揮毫し、夫より全唐紙に二行物一枚宛書き終り、画の合作等あり。其毫を揮ふや恰も雲烟の如し。紙上声を生し観る者驚嘆せしとぞ。扨③朝鮮の大先生等ハ、毎に日本の洋風を模擬するを見て心窃に之を賤んじたるが、六名の女子等従前の盛服（縫模様のふり袖緋の袴）にて善を尽し美を尽したるを見て先つ第一に此形装に驚き、次にハ箇計の小女子何をか能くせんと思ひしに、其伎倆の卓越なるに驚きたりといふ。後にて金綺秀人に語ッて、予日本に来て感服すべき物多しと雖も、殊に此小女子に驚愕せりと云へりとぞ。亦以て爾時の景況を想像すべし。当日花蹊女史席上にて金綺秀に贈られし詩を左に記す。［後略］

まずは傍線部①のように外務大丞宮本小一の邸宅で修信使正使金綺秀が参加した饗応が行われた際、跡見花蹊が招待に応じて門人の女子六名を率いてやってきたことを述べ、傍線部②において、席上で彼女らは各々紙に字を揮毫して画の合作等を行い、その出来栄えは観る者を驚嘆させたと報じている。さらに、傍線部③では、朝鮮の「大先生」は、毎に日本が洋風を模擬するのを見て心ひそかにこれを賤んでいたが、女子達が振袖緋袴の美しい姿で現れ、卓越な技量を見せたことに驚いた、と記述されている。

先に見た通り、『朝野新聞』の論説「隣交論」は、徳川幕府の時代に朝鮮通信使が「詩文の才を誇っていた」として批判的に述べている。その上で、今回の使節においては跡見花蹊とその弟子に対し修信使側が非常に驚嘆したという側面が強調されて記事にされている点が特徴的である。『朝野新聞』と同じく宮本邸での宴会の様子が書かれているものとしては『読売新聞』の次の記事が挙げられる。(14)

昨日出した宮本外務大丞のお邸へ一昨日朝鮮人が参ったときハ、上使とその外五人にて、大そうな御馳走で、手厚くいたし、跡見花蹊女史がお弟子のお嬢さんたちを連て参られ、筆を揮って合作、その外書画を書かれ、詩も作り、又ほかに琴、三味線、鼓弓、尺八の合せものも有り、一同感服して大よろこびで有ました。

やはり跡見花蹊とその弟子による揮毫や書画詩文の作成が話題となっているが、特に修信使側が驚嘆したというこ

とは強調されず、ただ「一同感服して大よろこび」と記されるのみである。一方『東京絵入新聞』の次の記事は、宗家の饗応について『朝野新聞』と同様の論調で書かれている。[15]

去る十日の正午頃華族宗重正君の饗応で朝鮮の正使はじめ上中の官人下官等まで凡三十名ばかり深川東大大(ママ)町の旧大六の別荘へ参り、同席にハ宮本外務大丞森山権大丞及び古澤・奥の諸君儒者にハ増田貢・亀谷行の両大人にて、専ら此二名が筆談で是彼の咄しを取次ですると又宮本君も筆談をなされました。其うちに奥原晴湖先生が弟子を五人（男三人女二人）連て席へ出たが、例の散髪で男めいた衣服だから髪さん達ハ疑つて女でハないと言張たが（まさか乳も見せなんだらうが）後に解つて大層興に入たとの事。別て駭いたハ先生の書画で、其うちにも日本の人と朝鮮人が打解て、酒宴をして居る座敷の体から庭の景況まで大紙へ描くに横からでも竪からでも自由自在に筆を揮ふにハ舌を巻ました。少し後れて関雪江先生が出て書れましたが、彼の正使等が日本へ渡来してから此位の書ハ見ないと誉て我も我も需めたので、数十本の扇を書せられたのにハ遉が達筆の先生も些困られたでありませう。又朝鮮の高永喜と言ふ人が筆を採て梅を描いた其下へ、晴湖さんが蘭を書くと、上々官の李容粛が梅の賛をされ、雪江さんが蘭の賛を致されたが、何れも妙でありました。又酒宴の間に正使その外が庭へ下りて釣などを垂れて慰さまれましたが、宗家ハ是迄の旧交もあれバ今日ハ親元へ来たやうな心持だと（お世事かハ知らないが）大歓びで晩方までゆるゆる遊んで帰つたとやらホンニ然うかも知れません。

要約すれば以下の通りである。①十日の正午頃に華族宗重正（元対馬藩主）の饗応で朝鮮の正使はじめ上中の官人下官等まで凡三十名ばかりが別荘へ招かれ、同席には宮本外務大丞や森山外務大丞などの外交官、その他儒者の増田貢や亀谷省軒らが参加した。専らこの二名が筆談で話しを取次ぎ、宮本小一も筆談を行った。②其うちに奥原晴湖が弟子を五人（男三人女二人）連れて参加。日本人と朝鮮人が打解けて、酒宴をして居る座敷の姿から庭の景況まで描き、自由に筆を揮った。③少し後れて関雪江が書を認めたが、修信使の正使達が日本へ渡来してからこれほどの書は見たことがないと称賛した。④朝鮮の高永喜と言う人が筆をとって梅を描いたその下へ、奥原晴湖が蘭を書くと、上々官の李容粛が梅の賛をなし、関雪江が蘭の賛をなした。どれも立派な出来栄えであった。⑤酒宴の間に正使達が庭へ

下りて釣などを垂れたが、宗家はこれまでの旧交もあることなので、今日ハ親元へ来たやうな気持だと大歓びで晩方まで遊んで帰つた。

このように、『朝野新聞』と同じく朝鮮人側が日本人の書の素晴らしさに感嘆することが書かれているが、お互いの画と賛の応酬の様子が書かれ、その出来栄えを朝鮮人日本人ともに評価している。また、宗家との「旧交」が意識されており、近世との連続面を強調していることが特徴的である。

ここで注目したいのは、ここでも跡見花蹊と同様に、女性とその弟子の子ども達が取り上げられていることに注目したい。引用した記事には、宗家主催の饗応で増田貢と亀谷省軒によって専ら筆談が行われたことが述べられている。しかし記事の焦点はむしろ女性とのやりとりに向けられている。管見の限りでは、近世の通信使と日本の文人との交流で、女性の存在が注目されることはほとんど見られない。しかし明治に入って行われた朝鮮との文人交流の場にこれほど女性が取り上げられている点が近世との違いとして特徴的であると言えるだろう。

第一次修信使との詩文応酬に関して最も記事が多いのは『郵便報知新聞』で、記事の中身も分量が多く、宮本小一及び宗重正による饗応に関しては、詩文内容まで掲載している点に特徴がある。[16] その『郵便報知新聞』では、次の記事に同じく宮本邸での様子が掲載されている。[17]

一昨七日外務大丞宮本君か朝鮮使臣一行を家に招かれたるにより午後二時頃入来したる人々にハ正使金綺秀を始め玄昔運・玄済舜・李容粛其外数名、伴接にハ外務大丞塩田・田邊の両君、医師浅田宗伯君と弊社の鋤雲にて、①筆談雑話一切欧臭米味に渉らざりしかハ、信使も東来始めて意に適したる由にて意を放ち、愉快を極めたる様子なりき。偖、煙茶式了りて杯酒献酬し、［中略］跡見花蹊女史が正使へ贈る即吟七絶一首と墨梅を揮毫したれハ、正使も速に和韻贈答あり。又女史が弟子［中略］いづれも七歳より九歳迄の小女子が大字を揮毫し、或ハ花竹を合作し、大に興を添へられましたが、年に似合ぬ出来方にて一同感服しました。惜い事に国癖にて紙に臨み躁の一字を免れぬが瑕でありました。又過日延遼館にて会晤の諸君へ贈る為め、正使か認めたる数聯を主人に託したるを偸見したり。其内一二を暗記し増たハ三條公に奉るハ白髪書生修信使黒頭宰相善隣人、又主人に贈れるは一人知巳平生楽両国交隣不世縁と申す類にて、其外も都へて銘々に能く肯綮に中たる語にてありき。其中誰君にてやら忘れたるが、②従古伝称宋人物至今不変漢衣冠、

なぞといふハ実に守旧頑固の真面目が能く知れ升す。③就てハ二十年前我国の鎖攘を唱へて屢々我輩を死地に瀬せました野郎が、一目見ましたら震へ附く程惚れて、決して征だの伐だのと申す事ハ噫にも出すまいと思われ升す。又主人公が信使に贈り及ひ信使一行の詩作も少々写して参りましたが、余り長くなり升すから次号に五覧（ママ）に入れ升す。

『郵便報知新聞』は、当時の新聞の中で最も多く詩文応酬について掲載しており、詩文応酬について深く関心を寄せていたことが分かるが、ここで行われた筆談や雑話が西洋についての話題に至らなかった点が修信使を喜ばせることとなった（傍線部①）として評価している。しかし最も注目すべきは文章中の「今に至り漢の衣冠を変えず」という言葉を「守旧頑固の真面目」と捉えている点である（傍線部②）。さらに、こうした朝鮮人の「守旧頑固」な姿を二十年前の攘夷論者が見れば「震へ附く程惚れて」、征韓論を唱えるようなことはないだろうとしている（傍線部③）。『郵便報知』は「非征韓論」を唱えた新聞であり、ここでは朝鮮人と征韓論者を共に「守旧頑固」と捉える認識が表れている。

続いて『郵便報知新聞』は雑報記事に宮本邸の宴会での詩文応酬内容を掲載している。[18] 記事はまず宮本小一による詩文から始まる。

葉間梅熟竹成林。君到東京尋旧歓。想得江華分袂日。城楼残雪峭春寒。

［葉間に梅は熟し、竹は林と成る。君東京に到り、旧歓を尋ぬ。江華分袂の日を得、城楼の残雪峭しく春寒からんことを想う。］

ここではまず、梅の熟す五月に修信使が「旧交」を尋ねに訪れたことを述べ、なおかつ「江華分袂」＝江華島事件のことに触れながら、「残雪」、「春寒」という言葉によって、朝鮮ではまだ日本に対して警戒が残っていることを暗示している。次の詩文では、「白頭不畏風濤険。復駕輪船到日東。［白頭風濤の険しきを畏れず、復た輪船に駕して日東に到る］」と述べ、最後に宮本の詩文は以下の詩で締め括られる。

西客東来滞帝畿。緑蔭堆裏訪柴扉。車書元是同文国。不用啼鵑苦促帰。

［西客東来し帝畿に滞して、緑陰堆裏せる柴扉を訪なう。車書元是同文の国なり。啼鵑を用いずして促帰に苦しむ。］

宮本邸に修信使が訪問したことを述べた後、「車書元是同文の国」と述べる。日本と朝鮮の関係を同じ文化圏の中で捉えており、そのことを修信使側にアピールしているものと考えられる。ここでは同じ文化圏にいる者同志の交流を深めることが唱われている。

続いて「韓客雑詩」として朝鮮人側の詩文が書き連ねられている。詩文内容そのものは、故事などを踏まえ、かなり難解なものとなっているが、一連の詩が暗示しているものは何なのかという点に絞って分析していきたい。

まず、「煙雨秋深」と、詩は秋の情景を映す。続く詩には、「疎林欹倒出霜根。扁舟一棹帰何処。[疎林は欹き、霜根は倒出す。扁舟一棹何処へ帰る。]」と唱われる。ここで注目したいのは船の存在である。続いて、「別涙年々添緑波」と、「別れの涙」についての詩が唱われる。続いて「賢者の言う所を聴く」と唱われる。そして最後に「喜有両眼明多交益友。恨無十年暇蓋読奇書。[喜びは両眼に有りて多く益友と交る。恨むらくは十年の暇無く、蓋し奇書を読まんとす。]」と唱われて結ばれる。

霜の現れる秋の描写から「船」の出現、別れの涙、そして最終的には「益友」を得たというこの詩文の展開から、この一連の詩は江華島事件の発生から修信使来日までの経緯を暗示したものであるということが出来るだろう。ここで考慮しなければならないことは、これは修信使側が日本に滞在している時に作成した詩文であるという点である。また、詩文という性格上、双方に「社交辞令」的要素が多分に含まれていることも考慮しなければならないだろう。ここで指摘したいことは、これを書いた修信使側の認識よりもむしろこれを引用した新聞作成者側の意図である。

『郵便報知新聞』は、宗重正による宴会についても記事を掲載している。まず、「韓使ハ一昨十日華族宗氏の招にて深川扇橋吹田氏が別荘に至りしが、浅草の河長両国の深川亭二軒の料理で晴湖・雪江・柳圃の三先生か詩書画の吟詠揮毫かあり[以下略]」[19]と、宴会で筆談唱和がなされた様子について触れた後、次の雑報で宮本邸における詩文と同じくその内容を掲載している。[20]

宗氏ノ深川宴ニ韓使ト唱和ノ詩ヲ得タレハ左ニ録ス。

和宮本公題画韻却寄晴湖女史　　金綺秀

東京女子尽風流　合璧聯珠共唱酬　情種千秋誰得似　無人解佩下西洲

[東京女子風流を尽くし、合璧聯珠共に唱酬す。情種の千秋誰か似るを得ん。解佩して西洲に下る人は無し。]

代晴湖女史谷金倉山　　岳陽

弱毫未足動名流　豈料清薦白璧酬　嘉樹清泉楽客意　陪遊恰似登瀛洲

［弱毫未だ名流を動かすに足らず。豈に清薦白璧を酬すを料らんや。嘉樹清泉客意を楽しませ、陪遊するは恰かも瀛洲に登るに似る。］

用宮本大丞見示之韵示李容粛　　増田貢

韓客来遊垂釣竿　深川之水写清顔　漢城（王城称漢城府）[21]

回節応非遠　莫憶巴山夜雨寒

［韓客来遊して釣竿を垂らす。深川の水、清顔を写す。漢城に回する節応遠くにあらず。巴山夜雨の寒きを憶ゆ莫かれ。］

奉和岳陽公　　金綺秀

旧誼源々証谷蘭　書楼瀟灑夏猶寒　幾年疑信空投杼　是処相逢却整冠　健筆縦横能奪目　清談温顔可輸肝　願君将此文章手　一洗層溟静倒瀾

［旧誼源々谷蘭に証す。書楼瀟灑夏猶寒し。幾年疑信投杼を空くす。是処に相逢いて却って整冠す。健筆縦横にして能く目を奪う。清談温顔肝に諭すべし。願わくば君将に此文章手を以て一洗層溟して倒瀾静にせんことを。］

呈朝鮮信使倉山金綺秀　　貢

漢城一去路漫々　修信来尋両国歓　応記日東新典制　堪観明代旧衣冠　雍容呉札生風采　雄弁鄭僑披肺肝　鴨緑江流助文勢　筆端浩蕩湧波瀾

［漢城一去して路漫々たり。修信来たりて両国の歓を尋ぬ。日東の新典制を記すに応じ、明代旧衣冠を観るに堪う。雍容呉札生の風采にして雄弁鄭僑肺肝を披す。鴨緑江流文勢を助け、筆端浩蕩にして波瀾を湧く。］

次亀谷省軒贈金倉山之韵送李容粛帰朝鮮　貢

無端縞紵接群賢　怡看雲階鵷鷺翃　鵑外月明促文旆　鷗辺風穏上仙船　眼寒富士峯頭雪　夢暖江華島上煙　何歳漢城訪君去　徳星光下闘詩薦

［無端の縞紵群賢に接し、怡も雲階に鵷鷺の翃するを看るが如し。　鵑外の月明文旆を促し、鷗辺風穏やかにして仙船に上がる。寒き富士峯の頭雪を眼にし、暖かき江華島の上煙を夢みる。何れの歳　にか漢城君去るを訪ね、徳星光の下、詩薦を闘わさん。］

ここでも社交辞令的な詩文が連ねられているが、それぞれ政治的な立場を暗示した部分があることに注目したい。金綺秀の詩文は、まず明治以前の「旧誼」を回顧している。続いて幾年も疑と信の間を揺れ動いていたが、讒言を信じることは空しいことであったとし、今回修信使として来日したことをきっかけに、日本人の「健筆縦横」さに目を奪われ、その高尚な話ぶりは真心のあるものであったと誉め

ている。続いて「願わくば君将さに此の文章の手をして層溟を一洗し、倒瀾を静にせんことを」として、文をよくするその手で暗い海を残らず洗い漱ぎ、崩れた波を静かにして欲しいと述べる。つまりここでは江華島事件を含む明治以降の一連の日朝外交から起こった朝鮮側の疑念を晴らして欲しいと暗に示していると考えられる。一方、増田貢の詩文は、基本的に朝鮮との「友好」を示し、修信使側の文才を褒め称えるものであることは確かである。しかしここで注目したい点は、「漢城一去路漫々　修信来尋両国歓　応記日東新典制　堪観明代旧衣冠」という文である。ここでは、日本の新しい法典や制度を記録すべきであることが前提となって、明代の衣冠も見るに堪えるものだと評価している。すなわち、詩文の中にさえ「開化」を誘導する日本の立場が表明されている。

また、同様に『郵便報知新聞』では、詩文を引用しながらも明確に「開化」という言葉が使われている記事がある。(22)

偶兵陽増田先生ヲ訪テ朝鮮ノ上官全州人李容粛・川寧人玄済舜・瀛州人高永喜、別ヲ惜ミ先生ニ贈ルノ写真ト先生之ニ答ルノ長篇ヲ視テ韓客ノ開化ニ赴クヲ奇トシ記シテ以テ諸公ニ告ク　横山薫英

朝鮮李容粛・玄濟舜・高永喜各贈撮影惜別乃詩以酬之且壮其行

風静東洋舟鵬去路悠々　其人不可止　其影乃可留　留之有奇鏡　精神紙背収　臨別辱相贈　衣冠粲然浮　一々記郷貫　門地定名流　川寧知何処　全州又瀛州披図案八道名勝付臥遊　再会豈容易　不及風馬牛　頼有真影在対之消離愁

[風静に東洋の舟、路を悠々と鵬去す。其の人止むべからず。其の影乃ち留むべし。之を留むるに奇鏡有りて精神紙背に収む。別れに臨み、辱なく相贈らる。衣冠粲然として浮かび、一々郷貫を記す。門地定めて名流ならん。川寧何処かを知る。全州又瀛州、図案八道を披き、名勝臥遊に付す。再会豈に容易ならんや。風馬牛に及ばず。頼みに真影在る有り。之に対して離愁を消す。]

修信使を撮影した写真は、金綺秀を撮影したものが残されており、『日東記游』巻一留館にもその様子が書かれているが、他の随員も撮影したかどうかについては上記の記事以外の史料で確認できない。この記事では随行員である李容粛・玄済舜・高永喜が帰国に際して増田貢に自らの写真を贈与したことが記されている。詩文は、増田貢から前三者へ送られたものであるが、ここには別れに際して贈られた写真のこと、随行員等の故郷について語りあったこと、

そして再開は容易ではないが、この写真を見ることによって離愁の思いを消そうと思うこと等が綴られている。

このように、修信使と日本人の「友好」的な面を写す詩文を引用しながらも、ここでは写真というものの存在に着目し、「韓客ノ開化ニ赴クヲ奇トシ」たためにこの詩文が引用されている。ここでも詩文が引用されながら「開化」が想起されている。詩文内容そのものには「開化」ということは意識されていないにもかかわらず、「写真」という存在が「開化」を想起させていることは事実である。

以上のように、詩文応酬に関わる記事においても日本の「開化」を朝鮮に見せるという意図は働いていた。そのことが最も明確に表れているのは、『朝野新聞』の次の論説である。[23]

［前略］陸軍ヤ海軍ヤ官省ヤ富強ヤ是レ其ノ驚ノ尤ナル者ニシテ嘗テ思慮ノ及バザル所ロナリ。然リ而シテ待遇ノ厚キヲ喜ビ、商売ノ軽薄ナラザルヲ喜ビ、物価ノ低キヲ喜ビ、鳥魚ノ新鮮ナルヲ喜ビ、酒ノ美ナルヲ喜ビ、技芸ノ工ナルヲ喜ブ曰ク何曰ク何喜ブ者限リアル事無シ。其情中ニ動テ発シテ詩篇ト成ル［以下略］。

ここでは、修信使が日本で陸軍等を見聞した感慨を「詩篇」として表したと記され、詩文に新しい位置づけがなされていることが分かる。詩文応酬に関わる記事においても日本の「開化」を朝鮮に見せるという意図は働いていた。

（3）新聞に報道されなかった詩文応酬

以上のように新聞報道で多く取り上げられた詩文応酬であったが、一方で新聞に取り上げられなかった詩文内容を取り上げたい。先述した通り、新聞各紙に取り上げられる筆談唱和記事や詩文そのものの内容は、近世とは異なる様相を呈していた。それでは、明治期に至って、朝鮮人との唱和は近世とはまったく異なってしまったのかを検討する。

ここでは、亀谷省軒[24]と金綺秀との詩文応酬を取り上げたい。[25]まず応酬は亀谷省軒から金綺秀への詩文から始まる。

四海皆兄弟　萬方亦一視　而況同文邦　誰復別彼此　鷄林与馬洲　一衣帯水耳　更有輪船便　烟波道孔邇　怪底千歳交　近来漸解弛　忽聞星軺至　翹然引領俟　鼓吹何錚錚　旌旗何韡韡　礼儀師鄒魯　文物則朱氏　偶望鸞鳳会　燕雀亦拊髀　未聴論之宏　已観貌之偉　想吾青年時三冬耽書史　志大而才疎　經綸業漫企　如今壮心磨

蕭然臥閭里　何以発吾蒙　幸接大方士　寸管心未尽　帰舟早已艤　渺渺白雲深　離愁満遠水　苟存誠与信　何慮

交情否　惟願源源来　尋盟従此始

「四海皆兄弟、萬方も亦た一視す。而して況んや同文の邦においてをや。誰れか復た彼此を別にせん。鶏林馬洲と一衣帯水。更に輪船の便有り。烟波の道孔邇たり。怪しくも千歳の交わりに底び、近来漸く解弛す。忽ち星軺の至るを聞く。翹然として引領して俟つ。鼓吹何んぞ錚錚とし、旌旗何んぞ華華とす。礼儀の師は鄒魯、文物は則ち朱氏なり。偶ま鸞鳳の会に望み、燕雀も亦た拊髀す。未だ論之れ宏きを聴かざるも、已に貌之れ偉なるを観る。想うに吾れ青年の時、三冬を書史に耽る。志大にして才疎し。經綸の業漫りに企だて、今に壮心を磨く如く、蕭然として閭里に臥す。何を以て吾が蒙を発せん。幸いに大方の士に接するも、寸管の心未だ尽さずに、帰舟早く已艤す。渺渺として白雲深し。離愁は遠水に満つ。苟も誠と信を存せば、何ぞ交情の否を慮らん。惟だ源源と来たらんことを願う。尋盟此より始まりとせん。」

この詩文ではまず朝鮮と日本が「同文邦」であることが書かれており、先に見た宮本小一の詩文と共通している。しかし、ここでは「鶏林与馬洲」の関係、すなわち朝鮮と対馬の関係が歴史的にいかに密接なものであったかが述べられている点が特徴的である。それは、この饗応が宗重正が主催したものであり、亀谷省軒自身も対馬出身であること等に起因している。また、亀谷は自分の青年期を回顧しつつこの饗応で「我が蒙を発」するために「大方の士」である修信使に会うことが出来た歓びを表している。そして最後に今回の修信使来日を契機に両国の通交が継続的に行われるよう願っている。

これに対する金綺秀から亀谷省軒への詩文には、日本の伝統文化や荻生徂徠に対する肯定的な評価が書かれており、次いで亀谷から再び応酬された詩文には、「斯道（儒道、仁義の道の意）尚未否」と書かれていた。

亀谷から金綺秀への最初の詩文中にある「何以発吾蒙幸接大方士」という部分には、「文明の日本人が未開の朝鮮人へ教える」という認識とは明らかに異なる、「儒教の国の朝鮮人を尊敬する」という近世の文人達と類似した認識が表れている。少なくともこのような内容の詩文は、新聞には掲載されていない。亀谷は一八七三年に官職を辞しており、「欧化主義の隆盛」には批判的であった。また、彼は朝鮮修信使が来日した時期に中国の明の名家言を集めた著書を多数執筆し、明治十年代には漢詩文の著述に没頭した人物である。このような人物が、ただの社交辞令でこのような詩文を書くとは考えにくいだろう。

以上のような第一次修信使来日による詩文応酬の経験は、

その後の日朝間の交流にも影響を与えた。その一端を探ることができる事例として、石幡貞[26]と第一次修信使として来日していた金綺秀らとの交流を挙げることができる。外務省に出仕し一八七六年より釜山へ駐在していた石幡が記した『朝鮮帰好余録』[27]に金綺秀らとの筆談の記録が書かれている。

3　その後の詩文応酬

ここでは十九世紀末から日露戦後にかけて起こった詩文応酬の様相に関連する特徴的な出来事について簡単に触れておきたい。

(1) 朴戴陽から菊へ渡された詩文

甲申政変後徐相雨を全権大臣とした使節が来日した。朴戴陽はその従事官として随行した人物であるが、彼が宿所の主人の娘菊の要請に応じて詩を与えた。そのことは彼の随行記録である『東槎漫録』にも記載されている。[28]『東槎漫録』ではその詩文を紹介した後、「徐相雨が菊を愛して詩を贈った」と日本の新聞が誤報したと記載している。また、そのことについて朴戴陽から徐相雨へ弁明の詩が寄せられた。新聞報道については『朝野新聞』等に同文の記事が掲載されている。[29]そこには、「徐氏の詩賦、朝鮮欽差大臣徐相雨氏ハ中々洒落の先生と見え此程左の一絶を賦し旅館伊勢勘の娘に贈られし由」とあり、特に「徐相雨が菊を愛して詩を贈った」と報道されているわけではない。あるいは巷でそのような噂が流れた可能性もあるが、推測の域を出ない。ただ言えることは、一八八四年の段階で、朝鮮からの使節に対して詩文を乞う人間がいたということである。

(2) 青山好恵『朝鮮名家詩集』と『東京二六新聞』

朝鮮の詩文に対する評価は日清戦争の時期に至っても日本人の朝鮮認識の一部として根付いていた。青山好恵[30]は著書『朝鮮名家詩集』の中で朝鮮の詩の美は「観るべきもの頗る多し」と評価した。しかしながら一方で「果然則世人読之。謂之朝鮮文華之精可、読之謂之朝鮮亡国之音亦可。」と述べ、「国家興亡」の時に詩文に心血を注ぐことに対する批判を表している。

一方日露戦争後には『東京二六新聞』に以下のような記事が掲載されている。[31]

①前年外国語学校に一朝鮮人雇はれ居りしが後辞職したるを以て或人何故辞職するやと問ひたるに学校より六七

十円の給料を頂戴するは有難けれども書家になりて田舎を巡回する時は、到る処に酒食の御馳走を受けたる外、一か月百円を余すは容易なければなりと答へたり、兎角日本にては今尚地方などにて、朝鮮人、支那人といへば、熊でも八でも書家か詩人でもあるかの如くに思ふ癖有り、近頃は又②苦力同様のナラズものを有志家なり、革命党なりと称し、歓迎するものの如し、余は十五六年前朝鮮より其の附近地方を旅行したることありしが、当時より朝鮮の名士なるもの、賤しむべきを知りて、彼の東京に流寓し居りし某の如きは余が極めて喜ばざる一人なりしが、友人中これと親交有り、殊にこれが為め少からざる財産を蕩尽したるものありしも、余は之れより先き坊主憎ければ袈裟までと、彼れと全く交通を絶ち居たり、今年は已に統監府までも出来たるに、尚朝鮮人を朋友かの如くに遇して、得意なるもの在り、沙汰の限りと謂ふ可し、余は英・仏・蘭諸国の植民地を巡遊したれども、其の地の欧人が未だ一人として、其の土人と倶楽部を共にし対等の交際なし居るものあるを聞かず、葡萄牙人の貧弱を以て尚然るにあらずや。

この記事に関して園部裕之氏は傍線部①の部分に注目しながら、「六〇～七〇円の月収の外国語学校の朝鮮人教師が就職後書家になって田舎を巡回したところ、至る処で酒食の御馳走でもてなされ、月収は軽く一〇〇円を超えるようになったという。日露戦後に至っても、朝鮮人の文化人を歓迎し、対等どころか尊敬の念をもって接する日本民衆たちが、地方ではある程度存在していた。」と述べている。[32] 記事内容自体は傍線部②のように「ならずものの革命家」と詩人を同列に扱っているという点で、決して詩文を能くする「朝鮮人、支那人」を肯定的に捉えるものではない点には留意すべきである。しかし、先述した菊の事例と同じようにこの時期に至っても新聞作成者が揶揄するような状態が存在していたとすれば、詩文応酬という行為が日朝関係において及ぼした影響の深さを示すものとも言えるであろう。

おわりに

以下、これまで述べてきた明治初期日朝間における詩文応酬の歴史的意味についてまとめたい。日朝間の詩文応酬を担った主体は「漢字文化」的素養を持った日本人であり、政府要人から在野の知識人、「女子供」まで幅広い層の日本人は、明治時代に至っても朝鮮に対して漢字文化的素養に長けているという認識を持ち続けていた。

背景にある時代状況としては、「西洋文明」の受容の必要に迫られている時であり、「文明開化」に絶対的価値を置く風潮と「和魂洋才」的価値観が混在する価値観の混乱期（自分たちが帯びている文化や価値と「西洋文明」との間で葛藤する時期）であり、「漢字文化」も未だ雑種的性格[33]（自己認識と切り離せない）を帯びている時代であった。

詩文応酬という行動は、共通の文化を持つという認識のもとで相互の意思疎通のための手段となった。しかしその意味するところは少なくとも①「西洋文明」に価値を置く認識のもと、詩文応酬という行為さえその価値に裏打ちされる。②「西洋文明」への反発から朝鮮との共通性に価値を置く③過去における朝鮮の「文」に対する劣等感（通信使時代の記憶）を克服するため自らの「文」の素晴らしさを誇示（「漢字文化」的素養、「西洋文明」の両者ともに）という三つに分かれる。③は近世の日本人にとって朝鮮の「文」に対する劣等感がいかに強かったかということを逆照射するものとも言えるが、「漢字文化」的素養については日本人の素養の高さを誇示する一方で、朝鮮人の能力の高さを評価する認識は残り続けた。ただしそれは、文化に対する評価と国の政情や人性に対する批判という両犠牲をもつ思考回路へ繋がるものであった。そこには、近世から常に「文」意識と表裏の関係にあった「武」の国日本という認識がつねにつきまとっていた。

最後に残された課題について述べたい。日本の近代化過程は、日本社会における漢詩文や詩文応酬自体の持つ意味が変容した時代でもあった。またそれは朝鮮の近代化過程における漢詩文の意味についても同様である。諺文との関わりなど、当時の朝鮮における文化状況の中に詩文応酬という行為を位置づける必要があるだろう。また、詩文そのものの作品としての優劣は相互認識の形成に一定の影響を及ぼすものではあるが、本稿では作品内容そのものの優劣を論じることよりも詩文応酬という行為をめぐってどのような朝鮮認識が形成されたかを中心に論じた。作品の優劣という点から生じる相互認識のあり方の分析については今後の課題としたい。

註

（1）本稿で対象とする時期に朝鮮半島に存在していた国家が朝鮮王朝であるため、ここでは朝鮮半島の地域に関する表記を統一して「朝鮮」とする。

（2）旗田巍『日本人の朝鮮観』（勁草書房、一九六九年）五頁。

（3）注(2)旗田前掲書。五頁。

（4）前近代の朝鮮認識と「蔑視」の問題については池内敏「日本人の朝鮮観を捉える視角」（『歴史評論』六〇二号、

二〇〇〇年）参照。

（5）李元植『朝鮮通信使の研究』（思文閣出版、一九九七年）

（6）張偉雄『文人外交官の明治日本――中国初代駐日公使団の異文化体験』（柏書房、一九九九）、齋藤希史『漢文脈と近代日本―もう一つのことばの世界』（日本放送出版協会、二〇〇七年）。特に齋藤氏は漢詩文が近代において日清両国の共通言語として機能したことを指摘している（同書一八四頁）。

（7）近年の興亜会研究については黒木彬文氏の研究がある（「興亜会・亜細亜協会のアジア主義―アジア主義の二重性について―（「興亜会のアジア主義」再考）」（『福岡国際大学紀要』No.15、二〇〇六年）。黒木氏は興亜会・亜細亜協会のアジア主義の二重性と朝鮮観との関係について論じており興味深いが、詩文応酬については存在を指摘するのみである。

（8）『草茅危言』（一七八九（寛政元）年）のうち「朝鮮の事」。『日本経済大典』第二十三巻（啓明社、一九二九年）四二二頁。

（9）『朝野新聞』は徳川幕府の外国奉行等を歴任した旧幕臣の成島柳北が社長兼主筆となった。一八七五年の讒謗律・新聞紙条例に対して激しい批判を展開したため、成島柳北が罰金・禁固の刑を受けた。一八七六年には大新聞の中で最大発行部数となった。本稿で引用する新聞は特にことわらないかぎり早稲田大学所蔵のマイクロフィルムを参照した。

（10）「隣交論」に見られる修信使認識については拙稿「第一次朝鮮修信使来日時にみる日本人の朝鮮認識と自己認識」（『朝鮮史研究会論文集』第四五集、二〇〇七年）を参照されたい。

（11）田星姫「第一次修信使のみた明治日本について」（『佛教大学総合研究所紀要』第五号、一九九八年、三月）。引用文は田星姫氏による訳を使用。

（12）韓国国史編纂委員会編集兼発行『修信使記録　全』（韓国史料叢書第九、一九七一年）九四頁。

（13）『朝野新聞』一八七六年六月十一日付。

（14）『読売新聞』一八七六年六月九日付。『読売新聞』は明治七年に日就社から創刊された。創刊の趣旨は、「通俗平易の新聞を作る」という点にあり、記事は平俗、惣ルビ、官命以外は言文一致体であった。社会雑報を主として、政治論を一切掲載せず。販売方法は旧幕府時代のよみうりにならって市内で呼び売りされた。目新しい販売方法は忽ち市中の評判となり、明治八年には隔日発行を日刊とした。明治九年段階で、大新聞も併せて売れ行きが首位であった。明治八年から縦覧所に無料で新聞を提供することもしていた。

（15）『東京絵入新聞』一八七六年六月十二日付。『東京絵入新聞』は明治八年に創刊された『平仮名絵入新聞』が明治九年に改題されたものであった。『東京日日新聞』の落合芳幾が社主であった。市井の雑報記事を読物風にして挿絵を配した。

(16)『郵便報知新聞』は一八七二年に前島密によって日本最初の郵便規則の活用を促すために発行された。一八七三年九月には旧幕臣の栗本鋤雲を迎えた。一八七四年には前島の手から離れ、急進の民権派として政府批判を展開した。
(17)『郵便報知新聞』一八七六年六月九日付。
(18)『郵便報知新聞』一八七六年六月十日付。
(19)『郵便報知新聞』一八七六年六月十二日付。
(20)『郵便報知新聞』一八七六年六月十六日付。
(21)括弧の部分は割注。
(22)『郵便報知新聞』一八七六年六月二十一日付。
(23)『朝野新聞』一八七六年六月十八日付。
(24)対馬出身の漢学者。一八三八～一九一三（天保九～大正二）年。安井息軒門下。明治に入り修史庶務を歴任し記録局長となる。一八七三年には官を退く。その後は光風社社長として出版業を行う。
(25)詩文の内容は上記『日東記游』を参照した。
(26)福島県士族。一八三九～一九一六（天保十～大正五）年。安井息軒門下で詩文漢学に通じる。外務省に出仕し明治九年より釜山へ駐在。明治十五年には壬午軍乱を経験。
(27)石幡貞『朝鮮帰好余録』（日就社、一八七八年）
(28)宋敏『明治初期における朝鮮修信使の日本見聞』（国際日本文化研究センター、二〇〇〇年）においてもこの事実の存在は指摘されている。
(29)『朝野新聞』一八八四（明治一七）年二月二十二日付。同様の記事は『自由之燈』同年二月二十四日付にも確認できる。
(30)愛媛県士族。一八七二～一八九六（明治五～明治二十九）年。明治二十二～二十九年病没まで仁川で『朝鮮新報』の経営者兼記者として勤務。『朝鮮名家詩集』は一八九四（明治二十七）年に刊行された。
(31)『東京二六新聞』一九〇六（明治三九）年三月十日付。ここでは不二出版の復刻版（一九九四年）を参照。
(32)園部裕之「江華島事件と日本民衆」（『史観』第一三〇冊、一九九四年三月）
(33)長志珠絵「臨界点としての漢字・漢学―帝国の内なる「他者」の行方」（『日本史研究』四六二号、二〇〇一年、二月）